
白雪娘

空綱 ハリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪娘

【Nコード】

N6186Y

【作者名】

空綱 ハリ

【あらすじ】

300の国がひしめき合っている時代のドイツのとある公国に、一人の男と少女が住んでおりました。

童話をモチーフにした事件に、無表情コンビが挑むミステリー。

昔々、ドイツがおよそ300の君主国がひしめき合っている時代、小さな公国に一人の男と、娘が住んでおりました。

.....

「シュネ、いる？」

その日、いつものように掃除と洗濯、夕食の下ごしらえまで済ませようやく人心地ついたシュネは、小さく肩をすくめた。

勢いよく入ってきた少女、ネルケはノックもせずに入ってきたと思えば、シュネの手にある物に視線を向けた。

友人の視線に、シュネは何も言わずに立ち上がる。客人のために、新たにお茶を淹れる必要があるからだ。ネルケがしょっちゅうここに来る理由の一つが、シュネの淹れたハーブティーなのだ。

立ち昇るカモミールの香りに一瞬相好を崩したものの、ネルケは「聞いてよ!」と身を乗り出した。

シュネは彼女に知られないよう、こっそりとため息をついた。

ネルケの「聞いてよ!」は、今から長い話が始まる合図である。

そしてそれに対する拒否権はシュネには許されていない。

(今日の午後は読めると思ったのに)

まくし立てるネルケの話に適当に相槌を打ちながら、シュネは未練がましく昨日借りたばかりの医学書をに想いを馳せた。

それは、彼女の保護者、この家の主でもあるヴィルフリートが、その雇い主から借りたものである。

「シュネ、聞いている？」

剣呑な光を帯び始めたネルケの瞳に、シュネは慌てて頷いてみせた。これ以上考え事をしていたら、ネルケの機嫌を著しく損ねてし

まう。

.....

本当にこの子は変わっている。

穏やかに相槌を打つシュネを見ながら、ネルケはこっそり心の中で呟いた。

自分よりも幼い13歳の小娘が、なぜこのように落ち着いた空気を醸し出せるのか、ネルケは常々不思議に思っている。その佇まいは一体どこから出てくるのだと、普段落ち着きがないと母親からお小言を食らうネルケとしては思わずにはいられない。

物静かで、それでいてどこか張り詰めたような緊張感さえ漂う様相を、彼女の漆黒の髪と、白い肌が一層際立たせている。そして、その顔。

通った鼻梁に、長い睫毛に縁取られた大きな黒い瞳、そして透き通るような白い肌。

あと2、3年したら、町一番の器量よしと呼ばれる自分をも軽く凌ぐだろうと、ネルケは公平な目で見ながら思った。今だって、飾り気の欠片もない簡素な服を着ていなければ、髪を無造作に垂らしていなければ、どこぞのお姫様と見まごう姿である。いや、みすばらしい恰好をしていても、漂う気品は、やはりただの町娘が持つには、些か不自然なように感じられた。

彼女の保護者（遠い親戚だと彼らは言うが、恐らく血の繋がりはないと、ネルケは密かに踏んでいる）ヴィルフリートが半年前、たった13歳の少女の手を引いて戻ってきた時は、一体何の冗談かと思っただけだ。

「それにしても、外套は残念でしたね。せっかく似合っていたのに」

突然の言葉に、ネルケは一瞬何の話をされたのかわからなかった

が、すぐに思い至った。

そもそも、自分が今日この家に来たのは、その件についてだったのだ。

「そうなのよ！ヘンゼルの奴、本当に憎たらしい！」

再び沸き起こった怒りに思わず立ち上がれば、ネルケの、綺麗に編まれた栗色の髪の手端がわずかに揺れた。ヘンゼルとは、同じ町に住む少年の名である。

「いいこと、シュネ。絶対にヘンゼルに近寄っては駄目。あいつ、段々と手に負えなくなってきた」

ネルケの心配は目の前にいる少女にある。目立つことを好まないシュネは、外に出る時は顔を覆うフードを被っているため町の人間のほとんどがその美しい素顔を知らないが、うっかり見られようものなら大事だ。確かに、彼女の保護者がヴィルフリートである以上、おおっぴらに手出しはされないだろうが、それでもわざわざ狼の群れに羊の姿を見せるべきではない。

「ヘンゼルは厄介よ。あいつ、裏では酷いことをするくせに、大人の前では真面目ない子を演じるから始末に負えないのよ。念のため、妹のグレーテルにも近づかないようにね」

グレーテルはヘンゼルの妹で、シュネよりも年下だ。一人ならただの頭の足りない子供だが、兄の後ろを、いつも付いて回っている。そして、そんなグレーテルを、ヘンゼルはことのほか可愛がっているのだ。

ネルケは力説するが、シュネはもともと、自分から町の誰かに必要以上に話しかけたりしない。地味な格好と顔を覆うフードが不気味に映るのか、町の人間も、シュネに話しかけようとはしない。ただし、対応が丁寧なのは、ひとえに町の警吏隊の隊長を務めるヴィルフリートの存在ゆえだろう。

鉄面皮と呼ばれる彼の姿を思い浮かべ、ネルケはちらりとシュネを見やる。

ヴィルフリート・クレールは町で一番の剣士だ。寡黙だが、任務

には忠実であり、誰に対する態度も丁寧で礼儀正しい。これでもう少し愛想があれば、それなりに町の娘たちに人気があっただろう。

実際、彼はよくよく見れば割と端正な顔立ちをしていたが、大きく屈強な体と鋭い目つき、それに何が起きても眉一つ動かない、血の通った人間か疑わしくなるあの姿が、人々を遠ざけるのだ。

無表情のままカモミールのお茶を飲んでいるシュネを見ながら、ネルケは思わずにはいられなかった。この不愛想な少女と、あの鉄面皮と一緒に暮らしているのだ。二人きりの時は、一体どんな会話があるのだろうか。

.....

「ヘンゼルか」

「ええ。泥を投げ付けられたため、ネルケの外套は汚れてしまったって」

シュネの作ったスープを一口飲んだところで、ヴィルフリートの手が止まった。

（あ、おいしいんだな）

特に表情に変化はなかったが、ヴィルフリートが感心していることは、何となく伝わった。それがわかるまで、結構な時間が必要だった。この人はきつと、表情筋を生まれる時に母親の胎内のどこかに忘れてしまったのだろう。自分も人のことは言えないが。

「あの少年についてはあまり聞かないな」

「ネルケの話では、大人の前では態度が違うそうです」
「なるほど」

納得したようにヴィルフリートは頷いた。思い当たることはあった。彼は自分の感情を出すことは不得手だが、他人の感情の機微に疎いわけではけてない。

ヘンゼルは確か今年で15歳。表と裏の顔を使い分ける器用さは、

長所にも短所にもなりうる。ましてやそれが、力つけたものの、まだまだ思慮の足りない少年であれば。

「おかげで今日は本を読めずじまいでした。せつかく、宰相様からお借りした本だったのに」

「次に俺がハインリヒ様の元に伺うのはまだ先だ。急ぐことはない」

ヴィルフリートの身分は、一介の警吏隊長である。だが、それとはもう一つ、彼には役職があった。

警吏の仕事をこなす一方、彼はこの国、ランドシュテーヘン公国の宰相を務めるグリューン家にも仕える身であった。と言っても、彼が宰相ハインリヒのために働いている姿を、シュネはあまり見たことがない。ただ、定期的に屋敷に赴き、何かしらの報告はしているようだ。その辺りのことを、彼はシュネにあまり語りたがらない。

この町に來た時一度だけ、彼に連れられ宰相の館に行ったことはある。その時、一言二言話ただけで、ハインリヒはシュネのことをいたく気に入ったらしく、シュネに館の図書室への出入りを許してくれたのだ。

その後も、ヴィルフリートを介して本を貸してくれることがある。ヴィルフリート自身はそのことを快く思っていないらしく、それ以降シュネが館に行くことはなかった。

「どうぞ」

食事をあらかた終えたところで、ヴィルフリートの前にシュネがカップを差し出した。中には、カモミールティーが湯気を立てている。

林檎に似た香りが優しく立ち昇る。宰相の館で珍しい紅茶と呼ばれる飲み物を口にしたことはあるが、それよりも遙かに、この少女が淹れてくれたハーブティーの方が彼の好みだった。

カモミールを摘み、花を乾燥させて煮出しているのだろうか、気にかかることが一つある。

「あまり、薬草の知識は人に見せるなよ」

心得ているのか、シュネは頷き、理由を尋ねることをしなかった。魔女狩りは昔ほど無体なものではなくなったが、薬草の知識があるだけでも、魔女呼^{ヘクセ}ばわりする人間がいけないわけではない。ことに、常日頃からフードを目深に被り、人付き合いをしない娘であれば、特に。

最近魔女という単語をあまり耳にしないのは、一つはこの国の公爵の方針によるものだ。魔女狩りという行為がどうこうというより、現実主義者である彼は、ろくな証拠もなく曖昧な言葉だけで全てを片付けるあのやり方が気に入らないのだ。それは、あの宰相の影響が強いのだろう。

そして、もう一つの理由は戦のせいである。ドイツの至る所で起こり、休み、また繰り返しこの長い戦のせいで、人々はそんな曖昧なものに目を向ける暇などないのである。幸いこの辺りは比較的平和ではあるが、近くのマグデブルクが10年ほど前、傭兵たちの略奪によって大きな打撃を受けたことは、まだ人々の記憶に新しい。

「大丈夫です。私がこの町でお茶を淹れるのは、ヴィルとネルケだけです。ネルケは、私が薬草の知識を持つことを知りません」

しかし、シュネの言葉は、翌日覆されることになる。

1 (後書き)

ランドシュテールヘンは架空の国です。

その日、シュネはマージョラムを摘みに少しだけ遠出をしていた。町はずれにある、森の入口である。

フードを目深にかぶり、保護者のヴィルフリートに言われたように、町の外には決して出ない。

こんな時、一度だけ行ったことのある宰相の館の中庭をつい思い出す。

あの中庭は見事だった。ヴィルフリートに連れられたシュネは、主に報告をしに行くヴィルフリートに言われ、この中庭で一人花々を眺めていた。季節に応じた色とりどりの花は、奥方の好みなのか。

「見事ですね」

最初に見た時、シュネは思わず眩き、庭師と思しき男がその声に顔を上げた。

「そうだろう、嬢ちゃんはどの花が好きか？ よければ少し分けてやろう」

「お気持ちはありがたいのですが、私にはもったいなさすぎます」

シュネの正直な感想を、謙遜と受け取ったのか、男は笑みを浮かべながら首を振った。よく見ると、まだ若い。帽子を被っているために顔はよく見えないが、ヴィルフリートと同じくらい、せいぜい30前後というところだろう。

（おや）

シュネはこの時初めて、まじまじと庭師の顔を見た。

「どうかしたかね？ 嬢ちゃん」

彼の顔も、そして次に視線を移したその腕も、シャツからのぞく肌も、庭師の物ではない。毎日炎天下で働く者の物ではない白さだ

った。そして、粗野な言葉遣いではあったが、彼の紡ぐ言葉は訛りがなく、耳に心地いい。その仕草も、物腰も、どこか気品がある。訝しげな自分をどこか面白そうに見つめる男に、ふと保護者の男の言葉が甦った。

「ハインリヒ様は、時々思いがけないことをされるから」

「・・・ハインリヒ様？」

それは、確信ではなく、ただ思わず出た言葉だったが、目の前の彼はその緑の目を丸くし、「ほう」と感嘆したように声を出した。

「こんなに早く見破られたのは初めてだ。お前がヴィルフリートが拾ったという子供か。名前は何と言う、年はいくつだ、何ができる」

高圧的な言い方ではなかったが、若い娘に無遠慮に尋ね、それに対する回答が得られることを至極当然の物と信じて疑わない姿勢は、いかにも貴族特有の尊大さだと、シュネはこっそり思った。

「・・・シュネです。年は13になったばかりです。・・・出来ることなど、特に何も」

薬草の知識がいくつかあるが、それは母親から教えられていたものの程度にすぎない。一国の宰相のために何かしてやれるような大層なものではないので、シュネはそれだけ言った。

そっけないシュネの返事に、面白そうに目を細めながら、ハインリヒは再び庭の花に目をやった。

「先程の答えはまだ聞いていなかったな。シュネはどの花が好きだ」
「・・・その中では、マリーゴールドでしょうか」

足元に咲く小さな花に目をやり、ハインリヒはもう一度「ほう」と、今度は面白そうに呟いた。

「マグノリアでも百合でもダリアでも、大輪のバラでもなく、地べたに咲く、この小さな花が」

確かに、中庭にある花は華やかなものが多かった。種類豊富なバラを中心に、色とりどりの花が咲いている。彼が疑問に思うのも、

無理はないかもしれない。

「理由を訊いても？」

「・・・花卉を、干してお茶にします」

「うまいか？」

「くせがなくさっぱりとします」

ふむ、と頷いたハインリヒは、その後、なぜかシュネを気に入り、図書館への出入りを許したり、来た時は自分の子供たちの遊び相手にとまで言いだしたのだ。ただ、そのことを知ったヴィルフリートは、シュネをなかなか館に連れて行くことはしなかったため、それ以降シュネがあの館に出入りすることはまだない。

[illegible]

人がいる。しかも、見覚えのない。

帰り道、帰路にこうとするシュネは立ち止まり、目の前でせわしなく動く黒い外套をまじまじと見つめた。

その外套を身につけている人物は、やはりシュネの知らない顔であつた。しかし彼女がさして警戒をしなかつたのは、その相手が女だつたからだ。しかも、どうやら歩くのが不自由らしい。杖を持っている様子がないので、今くじいてしまったのだろう。

「大丈夫ですか」

そつと声をかけると、相手は驚いたように一瞬身動きし、恐る恐るといった風に振り向き、シュネの瞳を見て、微かに落胆した表情を見せた。

（誰か探していたのだろうか）

女の様子に首を傾げつつも、シュネは彼女に近寄った。こういう時、ネルケのように人懐こい笑みが浮かべられたらいいのだけれど、詮無いことを考えながら。

ハンナと名乗った女は、シュネの差し出したマジヨラムのお茶を、礼を言いながら受け取った。年の頃は40代後半といったところか。さっきは気付かなかったが、こうしてみると、どこことなく品のよい女性だ。

彼女の外套は色こそ地味だが、良い素材を使っていることは、シュネの目に見ても明らかだ。留め金の部分は金縁のルビーで、傷一つない。仕草もどこか洗練されているし、彼女はどこかの貴族か、富豪の奥方なのかもしれない。

「もうすぐ、家の者が帰ってきますので。その時は、お送りします」
ヴィルフリートはあれでなかなか人がいい。自分や自分に属するもの、この場合はシュネや町民、彼の主人であるハインリヒに危害を加える者には一切の容赦がないが、無力な者には基本的に親切だ。悲しいことに、その事実を知っている者は少ないのだが。

「おいしい」

一口含み、ハンナは相好を崩した。それは、シュネが初めて見た彼女の笑顔だった。その後、ヴィルフリートが帰るまでの間、とりとめもない話をする。どうやら彼女は、これでなかなか話し好きなようだ。

ハンナはこの町の住民ではない。だが、町の端にある森の小屋に住んでいると言う。

「最近来たばかりだけど、少ししたら戻るつもりなの。あの小屋は、私が子供時代住んでいた家」

「昔の？」

「20年ほど前結婚する時に、他の国に」

そう言った彼女は、なぜか何かに耐えるように、きゅっと口をすぼめた。

「なるほど、里帰りですか」

シュネが思わず言うと、彼女は寂しげに首を振った。

「いいえ。私は里帰りなんかできる立場じゃないの。だって、20年前私は夫と幼い娘を捨てて他の男の元へ行ったのだもの」

ハンナの話は、それほど難しくはなかった。

20年前、彼女は貧しいながらも夫と娘とこの町で平穏に暮らしていた。そんなある日、ハンナはこの町にたまたま通りがかった貴族の目に止まり、互いに恋に落ち、迷った挙句彼について行ったらしい。

その貴族は妻がいたが、ハンナに小さい屋敷を買い与え、足繁く通っていた。やがて彼女は子を生み、何不自由なく幸せな生活を手に入れた。

男の妻に子はなく、また、彼はハンナを得た後は愛人を作ろうとしなかったため、彼女が生んだ男児が嫡男となった。その後も幸福な日々は続いた。

その後、最近になって彼が病気でこの世を去り、息子がしっかりと跡を継いだそんな時、ふとかつて自分が捨てた夫と娘が気になったらしい。

名乗り出る気はなかった。そもそも、行く気もなかった。行ったところで自分には何も言う権利も資格もない。だが、彼女の前の夫はあの後すぐに亡くなり、娘は若くして町の男の元へ嫁ぎ、今は貧困に喘いでいると知り、何か自分にできることがあればと、この町まで来てしまったのだ。

彼女がしばらくの宿にしている小屋は、彼女が幼いころ、まだ結婚する前に住んでいた小屋だ。

「娘さんとは？」

シュネが尋ねると、ハンナは力なく首を振った。

「まだ会ってないわ。会う勇気がなかなか出なくて……。もうじ

き迎えが来るから急がなくてはいけないのだけれど」

「迎えますか」

考えたら、彼女のような立場の人間が、一人でこんな所まで来るのは、本来ならあり得ない。

その時、玄関から音が聞こえてきた。ヴィルフリートが帰ってきたのだ。

[illegible]

「俺は、以前あまり人に薬草の知識を見せないように言っただがな」

ハンナを送り届けた後、帰ってきたヴィルフリートはわずかに批判するように呟いた。

「いけませんでしたか」

シュネとて、彼が言ったことは覚えていた。だが、足をくじき体が冷えてしまったあの老女を前にしてつい忘れてしまったのだ。

「いや、悪くはないが」

ヴィルフリートとて、シュネの小さな親切に目くじらを立てる気はない。ただ、どう言っているのかわからないだけだ。普段剣を振ってばかりいると、こういう時気の利いた言葉が出てこないから困る。

「ハンナさん、娘さんと会うことができるでしょうか」

20年前のハンナの行動をどう思うかと問われれば、やはり無責任だと思ふし、その彼女が今更娘のために何かする権利などないが、それでも、親としての情は彼女をこの町へ呼んだのだ。

貧困に苦しんでいる娘とやらが、母親の差し出した手をとればいいのだと、シュネは他人事ながら思うのだった。

身元の分からない女の焼死体が発見されたのは、その次の日のことだった。

発見されたのは、町はずれの森の入口にある、小さな小屋だった。

その日、ヴィルフリートは朝一番に町はずれの小屋から女の焼死体が発見されたとの報告を受けた。

厄介な事件はいつだって自分たちの部署である一番隊に回ってくる。

そういう部署なのだから仕方がないと言えばそれまでだが、戦慣れしていない自分たちには、この光景はいささか厳しいものがある。副隊長のレオはそう思った。

隊長ヴィルフリートの補佐を務める彼は、ちらりと上司の顔を見上げた。眉一つ動かさず目の前の凄惨な光景を観察する彼は、やはりまともな神経の持ち主とは到底思えなかった。

新入りのヨハンなど、部屋に入った瞬間顔を背けたというのに。無理もない、彼はまだ15になったばかりだ。

レオは酸鼻を極めるこの現場で、一人、臆面もなく遺体に近づく上司に尊敬と畏怖が混じった複雑な視線を向けた。他の同僚も、皆似たように上司の背中を見つめている。

しかし、考えてみれば自分たちが平和に慣れているからでもあるのだ。戦や小競り合いが頻繁に起こる時代ではあったが、このランドシュテーヘンは、その中でも比較的平穏な日常が続いていた。

領主と、その右腕を務める宰相の手腕で、治安維持はかなり徹底されている。自分たちの組織がこうも秩序を守っているのも、宰相であるハインリヒからの多額の援助があるからだ。

「何かありましたか？」

熱心に焼けただれた遺体を眺める上司に、レオはうんざり気味に声をかけた。真っ黒に焦げ、性別も年齢も服装も、この人物を示すものが何もわからない焼死体をまじまじと見ても、何かがわかることは到底思えなかったからだ。

その小屋には、小さな竈があった。目の前にある黒こげは、昨日この竈を使おうとしたらしい。

「竈を使おうとして足を滑らせ、鉄の扉が閉まった・・・じゃないですかね」

できるだけ穏便な方向であって欲しいせいか、ヨハンがおずおずと口に出した。

「違うな」

そんな彼のささやかな希望をあっさり打ち砕いたのは、やはり上司だった。

「門がかけられている」

「な、何のために・・・」

思わずヨハンが呟く。この竈はパンを焼くためのもののはずだ。人を焼く用途で使う物ではない。

「見てみる、扉の内側に傷がある。それも、この死体の目の前だけに、やけにたくさん。こっちの傷に比べて、どう見ても新しい。相引っ掻いたんだろうな。つまり、この遺体は生きながら、火をおこした竈に閉じ込められたということだ」

そんなこと、淡々と語らないでくれ。

レオは思わず胸の内で呟いた。そして再び目の前の焼死体に顔を向ける。焼かれて死ぬのは苦しいだろう。彼は、昔一度だけ火あぶりを見たことがある。泣き叫びながら焼かれたのは、夫を亡くしたばかりの憐れな女だった。痛々しい悲鳴を上げながら炎に包まれた彼女が魔女だとは、彼には今でも思えない。

あれ以来、この地では魔女裁判はなかったと思う。疑いをかけられた者はいても、無罪放免だった気がする。この時代、魔女狩り自体がすでに衰退の傾向にあったのと、ランドシュテーヘンの領主が、

火あぶりは、苦痛の時間が長い。彼の上司は、内側にいくつもひっかき傷があると言った。

「待て」

「はい？」

「え？だって……」

「なぜ？」

「それは……ヤーコブじいさんが『女の死体がある』って。あ、

その言葉に、ヴィルフリートは嘆息した。

「隊長？」

そう言った上司に、その場にいた全員が顔を向けた。目だけは合

「・・・俺はやっていないぞ？」

[illegible]

月の出ていない夜だった。

肌寒いこの季節は日が暮れるのも早い。ヴィルフリートはランタ
ンにある蝋燭の長さを確認しつつ、何度か後ろのハンナを見やった。
こうも暗いと、簡単にはぐれてしまうだろう。だが、彼女はしっか
りと彼について来ていた。

彼女の足の具合は、時間が経つにつれだいぶましになっていたら
しい。

シュネが作った軟膏を塗った湿布の威力を、誰よりも知っている
のはヴィルフリートである。

「そういえば、今使われている小屋は20年も使っていないと聞い
たが」

今夜は冷える。ましてや新月の夜だ。火を確保していないと死活
問題である。

「大丈夫です。ヤーコブさん。あの小屋の管理をされている方が、
定期的に見てくれていたそうです。あの小屋、たまに旅人に貸して
いたりしていたそうです。私も旅人として借りましたから。それで
得たけなしの宿賃の一部は娘のもとへ行っているそうで・・・
雀の涙ほどですけど」

そう言ってハンナは立ち止まり、ヴィルフリートに向けて微笑ん
だ。柔らかな笑みだったが、有無を言わせぬ圧力を感じさせるもの
だった。

「お見送り、ここまでで結構です。ありがとうございました」

警戒されているのかもしれない。ハンナは40代らしいが、手入
れがされているのか、街の同年代の女性より若く見える。まだまだ
十分美しい彼女からすれば、ヴィルフリートのような屈強な男は警
戒すべき対象なのかもしれない。

だからヴィルフリートも黙って頷き、そのまま軽く頭を下げた
を返した。

「シュネさんにもよろしく」

歩きだすヴィルフリートの背中に、おっとりとした声がかけられた。それに対する返事として片手を軽く挙げ、彼は振り返ることをしなかった。

「・・・以上だ」

「まあ、誰も隊長を疑ったりはしませんけどね」

レオが笑った。それにしてもこの上司は、あの状況でも表情一つ変えない。もし、自分があんな立場になれば多少なりとも動揺しただろう。なにしろ、殺人犯と疑われるかもしれないのだ。

「何にしろ物盗りの犯行だと思いますよ。さっきから探しています
が、金品の類が何一つない。まあ、もともとそうあったようにも見
えませんが、旅人なら路銀くらいは多少あるはずですよ」

小屋の内部を調べていたヨハンが戻ってきた。家中の壺や樽をひ
っくり返しても、何一つ出てこない。もともと飾り気のない簡素な
小屋だったが、生活の匂いが何一つないのは、物品も食料もないか
らだ。

「パン一つないですよ。水甕だけは無事でしたが」

「・・・この辺りは水が豊富だからな」

ランドシュテールヘンの近隣を流れるエルベ川はヨーロッパでも1
4番目に長い。

「しかしまずいな」

ヴィルフリートは、寂しげな室内を見渡し呟いた。

「彼女は市井の出とはいえ名のある貴族の嫡男の母親。このままう
やむやにはできないだろう」

彼女の話では、近いうちに迎えが来るはずだ。何としても、この
悲劇を起こした犯人を捕まえ、差し出さなくては、厄介なことにな
りそうだ。

.....

その日、シュネはフードを目深に被り、市場に出ていた。

街の住人はよそ者であるシュネにあまりいい顔はしていないが、それでも彼女は警吏隊長であるヴィルフリートが後見している少女である。街で起こるいざこざを解決する彼の不興を買うのは得策ではない。そのため、彼らは表面上はシュネに対して丁寧だった。

「あら、シュネ」

シュネに気付いたのはネルケだった。いつもの外套ではなく、地味で色あせたマントを着こんでいる。

「この前ヘンゼルに外套をやられたでしょう。仕方がないから母さんのお古を借りてるのよ」

忌々しそうに言いながら、ネルケは栗色の髪を払った。その手には、バスケットが提げられている。

「ワインとケーキ？」

この場合のケーキとは、どちらかというとクッキーに近い、レープクーヘンと呼ばれる焼き菓子だ。

「おばあさんのところにお見舞い。どうも今具合が良くないらしいのよね」

「それなら、そのうち私もお見舞いにケーキを焼きましょうか」

ネルケはにっこりと笑った。シュネの焼いたケーキは格別だ。材料は簡素だが、香辛料やハーブが上手く配合されていて、お気に入りなのだ。

「そうね。その時はよろしく・・・あ」

笑顔だったネルケがある一点を見つけた瞬間顔を曇らせたので、シュネは何事かと彼女の視線をそのまま追った。そこにいたのは、

母親に連れられ歩いている少年と少女の姿だった。

「ヘンゼルとグレーテル？」

「あいつよ、あいつがあたしの外套を駄目にしたんだから」

ヘンゼルはシュネより少し年下の少年であり、名前くらいは知っている。直接話したことはないけれど。大人しく、親にも従順な少年だったと記憶している。また、いつも彼について回る妹のグレーテルの面倒をよく見ていた。

妹への態度に優しい少年だと思われがちだが、一度見た彼の瞳には感情めいたものが何もなく、わずかに暗い翳りだけがあったのを、シュネは覚えている。

ネルケが外套を駄目にされたというのも、真実なのだろう。

「それにしても市場に来るなんて、あの貧乏一家が珍しいわね」

良く言えば正直、悪く言えば無神経なネルケの発言が、彼にそうさせる引き金になったのだとは思うが。

おそらく、彼は無意味に攻撃することはしない。

ネルケは村一番の美少女として人気がある。そんな彼女の機嫌を損ねるのは、この村で暮らすにはあまり得策ではない。

ヘンゼルはメリットもないのにリスクを冒すタイプではないと思う。ネルケにしたのは、今後余計なことを言わせないための牽制なのだろう。

その時、シュネの黒い瞳が大きく見開かれた。

「シュネ？」

「・・・すみません。急ぐので私はこれで」

それだけ言うと、シュネはくると背を向け、風のように駆けだした。普段家に閉じこもってばかりの内向的な姿からは想像もつかないほどその動きは軽やかで、実に機敏だった。

「シュネ!？」

走り出したシュネは、ネルケの慌てる声をもう聞いてはいなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「うゝ・・・・。まだ気持ち悪い・・・・」

今日嗅いだあの嫌な匂いは、未だ記憶に残っている。ひよつとしたら、髪や服についているのかもしれない。

ハンスは本日3度の洗顔を終えた後、くんくんと自分の衣服に鼻を寄せた。

本当に、今日の出来事は衝撃だった。焼いた肉の匂いは大好きだが、それは羊や鶏に限る。

同僚はそんな彼を笑ったが、彼はまだ15歳なのだ。

貧しい農家の、しかも三男坊として生まれた彼は、13になる頃には家を出て、自分で食いぶちを探すしかなかった。

ハンスのような境遇の人間は少なくない。家もなく職を探す彼らにとって、一番効率がいいのは傭兵となることだが、貧相なハンスは誰が見ても見劣りした。もともと争い事には向いていないと、誰よりも彼は自覚している。とはいえ野良仕事以外できるものがない。

そんな時、父の知り合いが警吏隊に知り合いという伝手を持っていたために、紹介してもらったのだ。その相手こそ、あの凄惨な現場でも眉一つ動かさない鉄の男ヴィルフリートだった。

「あの人はいい人だよ。ちっと不愛想なところはあるが」

紹介してくれた男はそう言った。確かにそれは認めよう。おまけに、人の才覚を見抜く勘も持ち合わせていた。

彼は紹介されたハンスが争い事には不向きだと瞬時に見抜いた。鍛えれば多少は実力もつくし、実際日々の鍛錬は確実に彼を強くした。だが、彼はこの仕事に本質的に向いていない。なぜなら、もとも優しい彼は、こういった血生臭いことが苦手なのだ。

「問題ない。何も、荒事ばかりじゃないからな、この仕事は」

警吏の仕事は意外と多様なのだ。報告書の作成は毎回しなくてはいけないし、組合内での揉め事の調停から、護衛もある。商人の中には税を誤魔化す者もいる。それらを見抜き取り立てることだってある。

ヴィルフリートはハンスにさまざまな教育を施すよう指示した。字の書き取りや簡単な計算、そして商業の仕組みまでも。そっちは性に合っているのか、彼は何でもすぐに覚えた。ひよっとしたら、自分は商人の方が向いているのではないかと思ったくらいである。今はまだ見習いとしてこうやって現場にもついて行ったりするが、そのうち書類仕事を回されるだろう。それでも、日々の鍛錬は強制されているが。

この後の地獄のしごきを思い身震いした時、目の前に暗い色の外套を羽織り、フードを目深に被った小さな姿が目に入った。

「・・・何か？」

子供だろうかと思いハンスは首を傾げた。こんなところに子供が一体何の用だ。

「すみ、ません、実は・・・」

予想に反して、その人物の声は涼やかな少女のものだった。今まで走っていたからか、息は上がり、言葉はとぎれとぎれだ。

「一番隊の、ヴィルフリートを・・・」

その時、強めの風が吹き、彼女のフードをめくった。

「あっ」

彼女の方も油断していたのだろう。フードはあっけなくめくりあがった。

ハンスは、思わずぎょっとした。

黒檀のように黒い髪、雪のように白い肌の世にも美しい少女が、血のように赤く頬を紅潮させて立ったままハンスを真っ直ぐに見つめていたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6186y/>

白雪娘

2011年11月25日07時46分発行